

【十二人の怒れる男】(paradox)

原作…レジナルド・ローズ

- 2 「法廷で聞いたろ、あの子は人殺しだ」
- 1 「有罪の、確固たる証拠がない？」
- 2 「目撃者がいる、向かいのビルの女性の証言が何よりの証拠だ。『事件の夜、偶然外を見たら、少年と父親がもみ合っていた、その後、少年が父親を刺すを見た』と、言っている。」
- 4 「彼女の部屋は高架鉄道を挟んだ向かいのビルで、『その時、電車も通過していた』と」
- 1 「七〇歳の老女が自分のビルから18メートルも離れている人間を夜間に確認できる訳はない」
- 2 「おい、お前の眼は節穴か、あの婆さん、証言台に立った時、裁判官のネームプレートを見て、名前を言ってたぜ……それに女は少年とは子供のころからの付き合いだ。間違える訳がない！ スラム街の奴らはクズだ！ 社会に必要な……」
- 4 「私もスラムの出身です」
- 十一人、驚いて4を見る。
- 4 「だからといって彼の味方をする訳ではありません。正しい評決を出したいだけです。証言の中に確かな有罪の証拠はない」
- 1 「父親の胸に刺さっていた、あの珍しいナイフは、少年が犯行の夜に買ったと認めています、映画へ行く途中落としたと言っています」
- 2 「おい、本当にあのガキがナイフを落としたと信じているのか！？」
- 3 「たまたまそのナイフを拾った人間が、父親を刺したとか……」
- 4 「似たナイフで刺した可能性ならある」
- 2 「奇跡でも起きない限り、ない！」